
BL-ack. **ブラック<小学生編>**

おがくず亮介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black・ブラック>小学生編<

【Nコード】

N8727Q

【作者名】

おがくず亮介

【あらすじ】

須田彰太と増田圭人。

二人はいじめっ子、いじめられっ子の関係だったが……。

日曜日、午前九時前。

少年は緑色のマウンテンバイクにまたがった。

小さな籠には、少年が肩に掛ける青いスポーツバッグは収まらない。

代わりに愛用のキャッチャーミットをそこに入れる。

帽子が風に飛ばされないようしっかりと被り直すと、少年はペダルを漕ぎ始めた。

少年の名は増田圭人。

全身を野球のユニフォームで包んでいる。

近所の少年野球チームのものだ。

圭人は野球が大好きだ。

野球に触れていると気持ちがいい。

圭人は陽気に鼻唄を歌いながらグラウンドを目指した。

練習はまず準備体操から始まり、次にキャッチボールをする。

主人のキャッチボールの相手はいつも決まっていた。

「彰太、投げるよー」

主人は両手を挙げる。

「おう」

間隔を空けて立つ少年が応答した。

主人の手を離れたボールは、緩やかな弧を描いて彰太のグラブに届いた。

「行くぞー」

と言い、今度は彰太が投げる。

割りと直線的な軌道だ。

このように何度もキャッチボールを繰り返した後、守備練習に移った。

ここで、圭人は一人バックネット裏に向かった。

出来るだけ練習に使える場所を広く確保したいので、荷物はすべてそこに置くことになっている。

ただしみんなが雑に置くので、いつも荷物はごった返している。

その中の一つから圭人は黒いバッグを引っ張り出した。

チャックを開けると、きちんとキャッチャーの防具が入れている。

そこに、彰太がやってきた。

「早く早く」

彰太は投げたくてうずうずしている。

「ちょっと待ってて」

圭人はプロテクターを広げ、着けた。

「手伝ってやるよ」

そう言うと、彰太はレガースを持って圭人の後ろに回った。

そしてしゃがんで、圭人の左足の脛にあてがい、後ろで留めた。

「あ、ありがとう」

「いいんだよ」

彰太は同様に右足にも着けた。

その間に圭人はファウルカップ、股間を保護する防具を装着し終えた。

「ほら」

彰太はキャッチャーマスクとヘルメットを差し出した。

受け取りながら、圭人はやはり妙だと感じていた。

実は最近、彰太の様子が変なのだ。

矢鱈に圭人に優しい。

以前は、彰太は俗に言うガキ大将で、彰太より体格の小さい圭人をいじめていた。

よく頭を叩いたりこき使ったりしたのに、今はこの通りであるから掴めない。

今年、小六になった頃から態度が変わり始めた、と圭人は思う。

彰太と圭人がバッテリーを組むことになったのも、ちょうどその頃だ。

正直、圭人は気が乗らなかった。

どんな意地悪をされるか分からないし、彰太のことは苦手だし。

今は彰太はいい友達だけだね。

圭人はキャッチャーミットを構えた。

彰太は綺麗なオーバースローから中々の速球を繰り出す。

顔の前に突き出したキャッチャーミットに刺さり、圭人は満たされる。

つまらないことなんか考えなくていい。

「彰太、ナイスボール！」

圭人はキャッチャーマスクの下で笑った。

2 - 1

ある練習での事である。

「あれー？」

圭人はバッグの中をまさぐっていた。

その日は大会が近付いているので、午前と午後に跨がって練習が行われる日だった。

ところが、バッグの中に弁当箱は入っていない。

おまけに水筒まで。

三時間もキャッチャーの装備で練習していたから、空腹と耐え難い餓えが圭人を襲う。

圭人はもう一度確かめる。

しかし、やはり無い。

家に戻るにしても、往復していたら弁当を食べる時間は無い。

「どうしたの？」

うちひしがれる圭人の隣に彰太が座った。

「弁当忘れた」

「飲み物もねーの？」

「うん」

へえと呟いて、彰太は水筒に口を付けた。

「これやる。あと飲んでいいよ」

彰太はその水筒を差し出した。

「い、いいよ、俺は水で」

「遠慮すんなよ。そうだ、弁当もやるよ」

弁当箱の中に、ご飯もおかずもまだ半分は残っている。

「本当にいいの？ 彰太、腹減るよ？」

「いいんだよ、ちよっと多かったし」

彰太は立ち上がった。

「その代わり、ちよっとだけ、その、後で俺の言うこと聞いてよ」

主人の方を振り向かずにそう言った。

「言うこと？」

主人は水筒の内容物を飲んだ。

スポーツドリンクより、心なしか甘い。

「まあ、後で」

彰太はどこかへ歩いて行ってしまった。

ぺろりと弁当を平らげた圭人は、無事に練習を乗り切ることができた。

午後はずっと紅白戦だった。

弁当を貰っていなかったらどうなっていたのかと思う。

とにかく今は防具を脱ぎ外したい。

しかし、そうはいかなかった。

「練習終わった後、ピッチング付き合ってよ、圭人」

それが弁当の代わりに与えられた条件だった。

当の彰太は監督に呼び出されている。

圭人は木陰に座った。

不意に股間をいじる。

長時間装着していたファウルカップのせいで、蒸れて不快だ。

キャッチャーミットの中も、手汗でべとべとする。

圭人は指先でファウルカップを叩いた。

こん、こんと軽い衝撃が圭人のまだ幼い性器を刺激し、くすぐったいような気がするが、何故だか気持ちよい。

味わったことの無い感覚。

ところが、それはすぐに勃起した。

ファウルカップの内側に沿うように反り勃起、非常に窮屈になってしまった。

圭人はズボンの中に手をつっ込んだ。

位置をずらそうと試みるも、しっかりスライディングパンツのポケット部分に収納されたファウルカップは動かない。

その時、

「悪い、遅くなっちゃって」

と、彰太が駆け足でやってきた。

「……何してんの？」

「あ、違う、え……」

みつともない姿を彰太に見られ、ふためく圭人。

「……ピッチングはいいや」

彰太が呟いた。

「な、何で？ やろうよ！」

彰太が引いているような気がして過剰に圭人は明るく振る舞う。

彰太はうつむいたまま、圭人も予想だにできなかった事を言った。

2 - 3

「俺の家に泊まれよ」

飛躍も甚だしい。

圭人の頭の中はこんがらがって理解ができない。

「明日日曜じゃん？ だから……」

彰太は顔を上げた。

「ってか、来なかったら今の事はらす！」

急に強気だ。

「え、それは困る……」

圭人は赤面した。

「だろ？　じゃあ決定だな」

「でも、親に伝えてから……」

「後でいいじゃん」

「よくないよ。一回家に帰るからね」

彰太を振り払って、主人は自転車に乗った。

「ちょ、待って！」

彰太は主人の自転車を掴んで止めた。

「あの、そのまま来て……」

「それって？」

「ユニフォーム……、あと野球道具も持ってきて」

主人は啞然とした。

いよいよ訳が分からない。

「ってか、持ってこなかったらばらす！」

明らかに弱味を握られた圭人は、彰太の言う通りにせざるを得なかった。

やはり彰太はガキ大将だ。

家に着いて、台所の母親に話しかけた。

「お母さん、俺、友達ん家に泊まってくる」

「友達ん家？ カツちゃんのところ？」

カツちゃんは圭人の友達の一人だ。

家も近所である。

「ううん、リトルのメンバーの家」

母親は料理をする手が止まった。

「誰？」

「彰太。多分、お母さんは分かんないよ」

「家はどの辺なの？」

一瞬返答に詰まる。

分からない、と言えはこの交渉は即失敗に終わるだろう。

「あの、学校の向こう側の辺り」

適当な嘘を付く。

だがそこは同一の学区内、母親が知らない児童がいるはずがない。

「あの辺に彰太くんなんて子はいないでしょう」

「う……。ねえ、行っちゃだめ？ 何も変なところに行くわけじゃないんだから」

主人は涙目で訴える。

ばらされたらたまらない。

「そんなに仲が良い子なの？」

母親は味噌汁の味見をする。

「ちゃんと帰ってこれるの？」

「うん」

実質的に許可が下り、主人の顔は明るくなる。

そして、できるだけ急いでグラウンドまで自転車を飛ばした。

グラウンドで彰太と圭人は合流し、彰太の家へ向かった。

橋を越え、踏切を渡り、隣町に入った。

もう三十分は漕いでいる。

圭人の足は痛みを帯びていた。

「まだ？」

「あの坂登ってすぐ」

彰太の指差す先には、緩やかながらも坂がずっと続いている。

「一気にスピード出して登るんだ！」

彰太は立ち漕ぎでぐんぐん加速していく。

「あ、待つて！」

少し遅れて圭人も懸命に付いていく。

自慢の六段階ギアの性能は上々で、圭人を抜いていく自動車がやけにのろく感じられた。

そうして坂を駆け上がると住宅街に入り、やがて彰太は自転車を停めた。

「JJJ」

須田という表札が掲げられた、そこは大きくもなく小さくもない、至極普通の一軒家。

駐車場に車は無い。

「今夜は父さんも母さんもいないんだ」

彰太は鍵を開けながら言った。

「お邪魔します」

主人は家の中へ入った。

彰太は二階の自室に主人を招き入れた。

勉強机の上には漫画が山積みになっていて、テレビにはゲームの配線が繋がれたままだ。

絨毯が敷かれた床に、じゃがりこの空き容器。

「チーズとサラダ、どっち食べる？」

彰太は赤と緑の容器を手にする。

じゃがりこだ。

主人はチーズのを選んだ。

荷物を部屋の隅に置き、主人は彰太の側に座った。

そして食べようとした時、不意に自分の手が臭った。

キャッチャーミットの革の匂い、というよりは、中で手汗と雑菌が混じった酸っぱい臭い。

今日は長時間キャッチャーミットを着けていたから臭いもひとしおだ。

「ちょっと、手洗ってくる」

「どうかしたの？」

「手、めっちゃ臭い」

その時、彰太の表情が僅かに変わった。

「ああ、下の廊下の一番奥に洗面所があるから、そこ使えよ」

「サンキュー」

圭人は部屋を出た。

階段を下りる音を確認すると、すぐさま彰太は圭人のキャッチャーミットを手にした。

手を入れるところを匂ってみる。

微かに酸っぱい臭いがして、彰太は興奮した。

でも足りない。

彰太はキャッチャーミットを手にはめた。

じっとり湿っているのは、圭人の手汗だろう。

彰太は移り香を求め、中で指を何度も擦った。

心拍数が上がる。

すると、階段を上ってくる音が聞こえた。

慌てて彰太は、キャッチャーミットを初めにあったように戻し、平

静を装った。

圭人は手の臭いを嗅ぎながら来た。

「取れたと思うけど、どう？」

彰太は急に差し出された圭人の左手にドキツとする。

「え、ああ……」

両手でそつと掴み、鼻先へ持ってくる。

柔らかい手から石鹸の香りがした。

「臭くないよ」

「よかった。ちゃんと手入れしてたんだけどなー、最近臭うようになっちゃった」

圭人はじゃがりこをつまんだ。

「下手くそだからだろ。俺のは全然そうならないもん」

彰太はテレビゲームを起動した。

「コントローラー、兄貴のと合わせて二個あるけど、やる？」

「何のゲーム？」

「いろいろ」

彰太は段ボール箱を引っ張り出した。

中には数十種類のゲームソフトが入っていた。

RPGからカーレース、プロレスまで幅広い。

主人はやはり、野球のゲームを選んだ。

オープニングも飛ばさずにしっかりと見て、二人はそれで遊び始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8727q/>

BL-ack. ブラック<小学生編>

2011年3月12日14時57分発行